

22の講義内容 音韻の響きと弾み

日本語に於ける音韻の特徴についてまず理會しておきたいことを列挙してみるに、

日本語の音調

二拍以上の音節語が膠着して発音されると、一つの音調を伴っている。

あめ【雨】 はし【橋】 くも【雲】 はな【花】 うみ【海】 かき【柿】
あめ【飴】 はし【箸】 くも【蜘蛛】 はな【鼻】 うみ【濃み】 かき【牡蠣】

この二拍語の音調は、日本語では東西において音の高低に差が見えている。

※一休さんの頓智話「このはしをわたるべからず」が関東の人には通じない

【橋】と【端】

※感謝のことばである「ありがとう」は、関東では「ありがとう」、関西では「ありがとう」と発音表現する。

○固有の日本語には、語頭にラ行音を有する語は存在しない。所謂、漢語の流入に順いラ行音のことが日本語に定着していく。ただし、付属語である助動詞「る」「らる」については動詞の活用語尾として存在する。

○固有の日本語には、濁音を語頭に置くことは存在しない。これ等の語も漢語流入に伴う形で生じてきている。

○奈良時代の日本語の音節は、万葉仮名表記を基に八十七種が用いられたと推定する。

阿伊宇衣於

加伎(紀) 久祁(氣) 古(許)

佐斯須勢蘇(曾)

多知都豆斗(登)

那爾奴泥怒(能)

波比(斐) 布弊(閉) 富

麻美(微) 牟賣(米) 毛

夜○由延用(餘)

羅理琉禮漏(呂)

和韋○惠袁(以上清音六十音)

賀藝(疑) 具牙(宜) 吳(碁)

邪土受是俗(叙)

陀遲豆傳度(抒)

婆毘(備) 夫辨(倍) 煩(以上濁音二十七音)

○平安時代に成って、イ音便やウ音便が発生し、これに伴って語間・語末に於けるイ・ウの音が著しく増加する。

○平安時代には「連声」と呼称する音変化が新たに発生する。漢語の複合に伴って起こる現象で、下

接語の語頭に n m t が加わる音変化である。

因縁〔イン**ネ**ン〕 仁和〔ニン**ナ**〕 観音〔クワン**ノ**ン〕 散位〔サン**ミ**〕 陰陽〔オム**ミ**ヤウ〕
闕掖〔ケツ**テ**キ〕 發意〔ホツ**チ**〕

○「梅」「馬」「生まる」「うばら」などの語頭音は、奈良時代までは「ウ」で表記されていたのが、平安時代になって、下接語の m b 音の変化が現れ、m 音となる。

「梅」〔ム**メ**〕 「馬」〔ム**マ**〕 「生まる」〔ム**マル**〕 「うばら」〔ム**バラ**〕
○鎌倉時代には長音が発生した。

「草（サウ）、行（カウ）、方（ハウ）、性（シャウ）」、

ソー コー ホー ショー

「こたふ」【答】、「たふとし」【尊】、「あふ」【逢】、

コトー トートシ オー

【法師】ホフシー→ホーシ

○室町時代→江戸時代

【酒】sake shake

○近代→現代

私たちはが記憶することばの三万語のうち、半分の一万五千語を一年に一度か二度しか使わない。実は、約三千語を使用するのが基本語であろう。母音の a i u e o 五つ。子音 k s t の十七音、音節も約一〇〇という。

〈コラム〉次の語の意味を答えなさい。「※二〇〇二年に出現した次の若者ことばは、二〇〇九年の若者たちに意味理解は可能か？」

- ①モスる
- ②マクる
- ③コピる
- ④カフェる
- ⑤ビリる
- ⑥びよる
- ⑦こくる
- ⑧スタバる

身分違いの言語コミュニケーション

平安後期の貴族と民衆とのコミュニケーションについて、当代の説話集『宇治拾遺物語』序の説くところの宇治大納言隆国の話しを紹介しよう。貴族社会が階層のちがいで直接相手にことばを交わすことすらしなかったこと、この風習は確乎たるものであったようだ。そこでのコミュニケーション方法としてとられたのが、「声こゑづくろい」や「目配せ」といった仕種に加えて、手振り身振りでの動作4-4式のコミュニケーション表現であった。はじめと秩序の維持のためには最善の方法であったようだ。

実際、撰家藤原氏最後の関白職であった藤原忠実の日記『殿暦』の康和五年（一一〇三）正月一日の記事をみると、

康和五年正月一日、〈辛巳〉、天晴、寅刻許拜天地四方、其儀東対南面：頃之（しばしありて）

時範朝臣來云、師遠朝臣候、余答云、コナタ、に召せ、退還、師遠朝臣來居戸許、余目之、師遠稱唯、進、

叙位勘文、余乍管取之置前見、問不審事等、見了止勘文、返給答、師遠退歸、余還入、頃之着束

帯ウチシタカサ
ね朝日多着之

とあつて、此の部分を訓読するに「師遠の朝臣さぶらふ」と。余、答えて云く、「こなたに召せ」退

き還る。師遠朝臣、来たりて、戸のもとに居る。余、これを目す。師遠、唯を稱して叙位の勘文を進む。となる。

ここで上位者である関白忠実は、師遠朝臣に口も聞かず目配せをしており、これに対し、中級貴族である師遠朝臣は「おう」と返事をして、忠実の前へ文書案を差し出すといった一連のコミュニケーションの仕種を読み取ることが出来る。この時代、ことばを交わすことは同等の身分であることを意味していた。逆に考えれば、直接会話を避けることが上下間の規律原則だったといえよう。この両者の間ですらこのような具合であるからして、貴族と庶民では口も聞かず、逢いもしない。ここに取り次ぎの役割を果たす年長けた仲介人や童部などの仲介者が介入することになる。

だが、こと都を離れ、旅程の身とも成ると貴族とてもこういうわけにはいかず、紀貫之『土左日記』にうかがえるような人と人のふれあいが見えているからこれまた妙趣といえよう。和泉の灘の箇所、

「船とく漕げ。日のよきに。」と催せば、楫取、船子供に曰はく、「御船よりおほせたぶなり。朝北の出で来ぬさきに、綱手早曳け。」と言ふ。この言葉の歌のやうなるは、楫取のおのづからの言葉なり。楫取はうつたへに、我歌のやうなること言ふとも有らず。聞く人の、「あやしく歌めきても言ひつるかな。」とて、書き出だせれば、げに三十文字あまりなりけり。今日、「波な立ちそ。」と、人々ひねもすに祈る験有りて、風波立たず。

とあつて、貫之自身が舵取りに直接声を掛けたということ、舵取りはこのことばに応じて、船上から曳舟の綱を取っている海岸淵の水夫に大声でその旨を指示したのである。実に珍しきコミュニケーションを茲に伝えていることになる。

十二世紀の下衆のことばを伝える『伴大納言絵詞』

この絵詞は、伴大納言善男の「應天門の放火事件」を描いたものである。そしてこの事件の顛末は、この善男の家に出納として仕えていた男とその隣家の左兵衛の舍人として勤務している男が市井人の子供の喧嘩に根ざした些細ないざこざにほかならない。

内容構成は、①放火され、炎上する応天門 ②無実の罪で捕らえられる左大臣源 信と、嘆き悲しむ女房ら③舍人の子供の喧嘩から、真犯人が発覚 ④伴善男を捕らえる検非違使の一行となっている。

<http://www.yomiuri.co.jp/tabi/sketch/20061101b03.htm>

ハイビジョン特集「タイムスリップ伴大納言絵巻」NHKBShtv ハイビジョン特集「タイムスリップ伴大納言絵巻」[2007年11月12日(月)午後2:00～午後3:50(110分)]
10月15日(日) NHK教育 9:00～10:00

▽平安の政界スキャンダル国宝伴大納言絵巻の謎解明▽四十五アートシーン 出演、手塚雄二檀ふみ 野村正育「新日曜美術館」▽国宝『伴大納言絵巻』を所蔵する出光美術館は二年前、東京文化財研究所に依頼してハイテク技術による科学調査を行ってきた。今秋、その調査の成果とともに『伴大納言絵巻』全巻が公開された。『伴大納言絵巻』は、平安時代に大内裏の応天門が炎上するという実際に起きた放火事件を基に描かれており、上・中・下巻合わせて二十七メートルにもなる大作である。絵巻の作者は、十二世紀を代表する宮廷絵師の常磐光長。科学調査によって見えてきた彼の卓越した構成力や、宮廷内部に出入りした者でなければ知り得ない正確さで描き出された当時の人々の姿を紹

介し、絵巻の醍醐味を伝える。

貴族が云う「轉り」と云うことば

「轉り」は、鳥の鳴き声を云うのだが、これを同じく人のことばに用いて「鳥の鳴くように無意味で不可解な言語」と云うふうには短絡に考えがちではあるが、これを湛然に見極めていくと、「さへづる」とは、古語「さひづる」である。この「さひづる」なる語の前身の語として『万葉集』の枕詞に「さひづるや」「さひづらふ」（韓・漢）さらに「ことさへく」（韓・百濟）がある。現代語で、騒々しく口々に言い合う声を象徴語音で「ガヤガヤ」と摸寫する。

『今昔物語集』卷第二十八、頼光郎等共、紫野見物語第二

今昔、攝津ノ守源ノ頼光ノ朝臣ノ郎等ニテ有ケル、平ノ貞道・平ノ季武・□ノ公時ト云フ三人ノ兵有ケリ。皆、見目ヲ矚々ク、手聞キ魂太ク思量有テ、愚ナル事无カリケリ。然レバ東ニテモ度々吉キ事共ヲシテ、人ニ被恐タル兵共ケレバ、攝津ノ守モ此レ等止事无キ者ニシテ、後前ニ立テゾ仕ヒケル。

而ル間、賀茂ノ祭ノ返サノ日、此ノ三人ノ兵云合セテ、「何カデカ今日物ハ可見キ」ト謀ケルニ、「馬ニ乗り次キテ紫野ヘ行カムニ、極ク見苦カルベシ。歩ヨリ顔ヲ塞ギテ可行キニハ非ズ。物ハ極テ見マ欲シ、何ガ可為キ」ト歎ケルニ、一人ガ云ク、「去来、某大徳ガ車ヲ借テ、其二乗テ見ム」ト。亦一人ガ云ク、「不乗知又車ニ乗テ、殿原ニ値ヒ奉テ、引落シテ被蹴ヤ、由无キ死ニヲヤセムズ

ラム」ト。今一人ガ云ク、「下簾ヲ垂テ女車ノ様ニテ見ムハ何ニ」ト。今二人ノ者、「此ノ義吉カリナム」ト云テ、此ク云フ大徳ノ車、既ニ借持来ヌ。下簾ヲ垂テ、此ノ三人ノ兵、賤ノ紺ノ水干袴ナドヲ着乍ラ乗ヌ。

履物共ハ皆車ニ取入レテ、三人袖モ不出サズシテ乗ヌレバ、心慄キ女車ニ成ヌ。

然テ紫野様ニ遣セテ行ク程ニ、三人乍ラ、未ダ車ニモ不乗ザリケル者共ニテ、物ノ盖ニ物ヲ入テ振ラム様ニ、三人被振合テ、或ハ立板ニ頭ヲ打チ、或ハ己等下チ頬ヲ打合セテ仰様ニ倒レ、但シ様ニ但シ轉テ行クニ、惣テ可堪キニ非ズ。如此クシテ行ク程ニ、三人乍ラ酔ヌレバ、踏板ニ物突散シテ、烏帽子ヲモ落シテケリ。牛ノ一物ニテ、早ク引ツ、行ケバ、横ナハリタル音共ニテ、「痛クナ不早メソ々々」ト云行ケバ、同ク遣次ケテ行ク車共モ、後ナル歩チ雑色共モ、此ヲ聞テ恠ビテ、「此ノ女房車ノ、何ナル人ノ乗タルニカ有ラム、東鴈ノ鳴合タル様ニテ吉ク□タルハ、心モ不得又事カナ。東人ノ娘共ノ物見ルニヤ有ラム」ト思ヘドモ、音氣ハヒ大キニテ男音也、惣テ心不得ゾ思ケル。

此テ、既ニ紫野ニ行着テ車搔下シテ立テバ、餘リ疾ク行テ立ツレバ、事成ルヲ待ツ程ニ、此ノ者共、車酔シタル心地共ナレバ、極テ心地悪ク成テ、目轉テ万ノ物逆様ニ見ユ。痛ク酔ニケレバ、三人乍ラ尻ヲ逆様ニテ寝入ニケリ。

而ル間ニ、事成テ物共渡ルヲ、死タル様ニ寝タル者共ナレバ、露不知テ止ヌ。事畢テ車共懸ケ騒グ時ニナム目悟メテ驚タリケル。心地ハ悪シ、寝入テ物ハ不見ズ成ヌレバ、腹立シク妬タク思フ事无限キニ、「亦返サノ車飛バシ騒ムニ、我等ハ生テハ有ナムヤ。千人ノ軍ノ中ニ馬ヲ走ラセテ入ラム事ハ、常ニ習タル事ナレバ不怖ズ。只貧窮氣ナル牛飼童ノ奴獨ニ身ヲ任セテ、此ク被接レテハ、何ノ益ノ可有キゾ。此車ニテ亦返ラバ我等方命ハ有ナムヤ。然レバ只暫シ、此テ有ラム。然テ、大路ヲ、澄シテ、歩ヨリ可行キ也」ト定メテ、人澄テ後、三人乍ラ車ヨリ下ヌレバ、車ハ返シ遣ツ。其ノ後、皆

□ヲ履テ、烏帽子ヲ鼻ノ許ニ引入テ、扇ヲ以テ顔ヲ塞テゾ、攝津ノ守ノ一条ノ家ニハ返タリケル。
季武ガ後ニ語リシ也、「猛キ兵ト申セドモ、車ノ戦ハ不用ニ候ナリ。其ヨリ後懲トモ懲テ車ノ當
ニハ不罷リ寄ズ」ト。

然レバ、心猛ク思量賢コキ者共ナレドモ、未ダ車ニ一度モ不乗ザリケル者共ニテ、此ゾ悲シテ醉
死タリケル、嗚呼ノ事也トナム語リ傳ヘタルト也。「大系五54頁⑩〜56頁⑨」

この女車に乗った東国武士三人の「横ナハリタル音」は、當時の京都ことばが標準語で、これと異
なる地方田舎ことばが喩えてれば、「東鴈ノ鳴合タル様」に聞こえたというのである。「訛り」語、「訛
り」声は京人にとつてはかまびすく耳に障るのであれば、「さへずる【轉】」という動詞表現が用い
られてくる所以か。

ここでは、「さへずる【轉】」という表現は見えないが、紫式部は、『紫式部日記』〔寛弘五年（一
〇〇八）のなかで、「あやしき賤の男のさへづりありくけしきどもまで、いふふしに立ち顔なり」
と身分の低い男どもが邸内で立ち働くときの話ぶりを「轉り」と表現している。

次に、異国語の声はどのように聞きなしているのだろうか。『宇治拾遺物語』一〇三段に「東大寺
華嚴会の事」「卷第八・五」に、

これも今は昔、東大寺に恒例の大法会あり。華嚴会とぞいふ。大仏殿の内に高座を立てて、講師上
りて、堂の後よりかい消つやうにして、逃げて出つるなり。古老の伝へて曰く、「御堂建立のはじめ、鯖
売の翁来たる。ここに本願の上皇召しとどめて、大会の講師とす。売る所の鯖を、経机にし置く。
変じて八十華嚴経となる。即ち講説の間、梵語をさへづる。法会の中に、高座にしてたちまち失
せをはりぬ」。また曰く、「鯖を売る翁、杖を持ちて鯖を担う。その物の数八十、則ち変じて八十華

嚴経となる。件の杖の木、大仏殿の内、東回廊の前に突き立つ。たちまちに枝葉をなす。これ白榛
の木なり。今伽藍の榮衰へんとするに随ひて、この木榮え、枯る」といふ。かの会の講師、この比
までも、中間に高座よりおりて、後戸よりかい消つやうにして出づる事、これをまなぶなり。

この鯖の杖の木、三十四年が前までは、葉は青くて榮えたり。その後なほ枯木にて立てりしが、こ
の度平家の炎上に焼けをはりぬ。世の末ぞかしと口惜しかりけり。

とあつて、聖武天皇の御代、東大寺毘盧遮那佛の供養に関わる譚で、『東大寺要録』『今昔物語集』『建
久御巡禮行記』『古事談』にも引用されている有名な物語である。ここに、「梵語をさへづる」と表
現する。この「轉る」は、「意味不可解ながらも朗々と語り響く」意にとれよう。

また、『今昔物語集』卷第三十一、「陸奥國安倍頼時、行胡國空返語第十一」に、

「若此ノ船見テ云ニヤ有ム」ト思ヘバ、怖シクテ弥ヨ隠レテ見ル程ニ、此ノ胡ノ人一時許轉合テ、河ニハラ／＼ト打
入テ渡ケルニ、千騎許ハ有ラム見エケル。

とあつて、胡人の話し声を「轉る」と表現する。古くは『日本書紀』にも「からさへづり」の訓を見
出すことから異国のことばで語られる声を聞いた本邦の書き手が「轉る」と表現することを確認で
きよう。

古辞書に動詞「轉り」はどう記載されているか

平安時代後期に成る観智院本『類聚名義抄』（正宗敦夫仮名索引）には、

サヘツリトナフ 喝嗑

くくと」「ブラリくと」などの清濁両語の組み合わせが存在する。此等の語を実際に近現代語の作品資料を中心にしてご自身で調査してみよう。

補注

一四 伴大納言(ばんのだいなごん) 焼(く) 應天門(おうてんもんを) 事「巻十・一」
今は昔、水(み)の尾(を)の御門(みかど)の御時に、應天門やけぬ。人のつけたるになんありける。それを、伴善男といふ大納言、「これは信(まこと)の大臣(おとど)のしわざなり」と、おほやけに申し(まうし)ければ、その大臣(おとど)を罪(つみ)せんとせさせ給う(ふ)けるに、忠仁公、世の政は御おとうとの西三条の右大臣にゆづりて、白川にこもりゐる給へる時にて、此(この)事を聞き(き)おどろき給(たまひ)て、御烏帽子直(ひた)垂(たれ)ながら、移(うつし)の馬に乗給(のりたまひて)乗(のり)ながら北の陣(ぢん)までおはして、御前に参り給(たまひ)て、「このこと、申(まうす)人の讒言にも侍らん。大事になさせ給(たまふ)事、いとことやうのことなり。かゝる事は、返々(かへすがへす)よくたゞすて、まこと、空事(そらごと)あらはして、おこなはせ給(たまふ)べきなり」奏(そう)し給(たまひ)ければ、まことにおぼしめして、たゞさせ給(たまふ)よし仰(おほせ)よ」とある宣旨うけたまはりてぞ、大臣(おとど)はかへり給(たまひ)ける。

左の大臣(おとど)は、すぐしたる事もなきに、かゝるよこざまの罪(つみ)にあたるを、おぼしなきて、日の装束して、庭にあらごもをしきて、いでて、(と)天道(てんたう)にうたへ申(まうし)給(たまひ)けるに、ゆるし給ふ御使に、頭中將(とうのちゅうじやう)、馬にのりながら、はせまうでければ、いそぎ罪せらるゝ使ぞと心得て、ひと家なきのゝしるに、ゆるし給(たまふ)よしおほせかけて歸(かへり)ぬれば、又、よろこび泣(な)きおびたゞしかりけり。ゆるされ給(たまひ)にけれど、「おほやけにつかまつりては、よこざまの罪いで來(き)ぬべかりけり」といひて、ことに、もとのやうに、宮づかへもし給はざりけり。

此(この)ことは、過(すぎ)にし秋の比(ころ)右兵衛の舎人(とねり)なるもの、東の七条に住(すみ)けるが、つかさに参りて、夜更(ふけ)て、家に歸るとて、應天門の前を通(とを)りけるに、人のけはひしてささめく。廊(らう)の腋(わき)にかくれ立(たち)て見れば、柱(はしら)よりかゝぐりおるゝ者有(あり)。あやしくて見(み)れば伴大納言也。次に子なる人おる。又つぎに、雑色(ざうしき)とよ清と云(いふ)者おる。何わざして、おるゝにかあらんと、露(つゆ)心得(え)でみるに、この三人、走(はし)ることかぎりなし。南の朱雀門さまに行(ゆく)程に、二条堀川のほど行(ゆく)に、「大内のかたに火あり」とて、大路のゝしる。みかへりてみれば、内裏(だいり)の方とみゆ。走(はし)り歸(かへり)たれば、應天門のなからばかり、燃(も)えたるなりけり。このありつる人どもは、この火つくとて、のぼりたりけるなりと心得てあれども、人のきはめたる大事なれば、あへて口より外(ほか)にいださず。その後(ち)に、左の大臣(おとど)のし給へる事とて、「罪(つみ)かうぶり給(たまふ)べし」といひのゝしる。あはれ、したる人のあるものえお、いみじいことかなと思へど、いひいだすべき事ならねば、いとほしと思ひありくに、「大臣(おとど)ゆるされぬ」と聞けば、罪(つみ)なきことは遂(つゐ)にのがるゝものなりけりとなん思(おもひ)ける。

かくて九月斗(ぼかり)になりぬ。かゝる程に、伴大納言の出納(しゅつなふ)も家の幼(おきな)き子と、舎人が小童といさかひをして、出納のゝしれば同じく出(い)でて(と)、みるに、よりてひきはなちて、我(わが)子をば家に入(いれ)て、この舎人(とねり)が子のかみをとりにて、うち

ふせて、死（し）ぬばかりふむ。舍人（とねり）思ふやう、わが子もひとの子（こ）も、ともに童部いさかひなり。たゞさではあらで、わが子をしもかく情（なさけ）なくふむは、いとあしきことなりと腹だゝしうて、「まうとは、いかで情（なさけ）なく、幼（おさな）きものをかくはするぞ」といへば、出納いふやう、「おれは何事いふぞ。舍人（とねり）だつる。おればかりのおほやけ人を、わがうちたらんに、何事のあるべきぞ。わが君大納言殿のおはしませば、いみじきあまちをしたりとも、何ごとの出（い）でえくべきぞ。しれごといふかたあかな」といふに、舍人（とねり）、おほきに腹（はら）だちて、「おれはなにごといふぞ」「わが主（しう）は、我口（わがくち）によりて人にもおはするは知らぬか。わが口あけては、をのが主（しう）は人にてありなんや」といひければ、出納は腹（はら）だちさして家にはひ入る（いり）にけり。

このいさかひをみると、里隣（さととなり）の人、市（いち）をなして聞き（き）ければ、いかにいふことにかあらんと思（おも）ひて、あるは妻子（めこ）にかたり、あるはつきつきかたりちらして、いひさわぎければ、世にひろごりて、おほやけまできこしめして、舍人を召（め）して問（と）はれければ、はじめはあらがひけれども、われも罪かうぶりぬべくといはれければ、ありのきだりのことを申（まう）してけり。その後（ち）大納言も問（と）はれなどして、ことあらはれての後なん流されける。

應天門をやきて、信（まこと）の大臣におほせて、かの大臣（おとど）を罪（つみ）せさせて、一の大納言なれば、大臣にならんとかまへけることの、かへりてわが身罪（つみ）せられけん、いかにくやかりけん。

〔梗概〕水尾帝（清和天皇）の御時、応天門が焼けた。その時、大納言・伴善男が「これは左大臣・源信の仕業です」と申し出た。すると、右大臣藤原良相の兄の忠仁公（太政大臣・藤原良房）が白川から駆けつけて、そのようなことはよくよく調べてから対処なさいますようにと清和天皇に奏上。頭中将（藤原基経）の働きもあって、源信に関しての取り調べは保留になる。そして秋頃、右兵衛の舍人が、応天門が焼けた直前、門の前から伴善男とその息子（伴中庸）、それに雑色のとよ清の三人が駆け出して来たのを見たとして申し出た。この舍人は大変なことだからと思ひ黙っていた。しかし、ある時大納言の出納の家の子供と自分の子供が喧嘩をして、自分の子供が死にそうなほど痛めつけられる事件があった。抗議をしに行くと、出納は自分の主人は大納言だぞと威張って、謝ろうともしない。そこで腹を立て自分は応天門のことを知ってるんだぞと言う。すると、そのやりとりを聞いていた近所の人々が噂に噂を重ね、やがてお上の耳に届いた。そこで、役人がその舍人を呼びだして、応天門の事件について何を知っているのか問いただした所、その日火事の起きる直前に伴善男らを見たことを語る。かくして、伴善男らは処分を受けて流刑にされたのである。